

特集 戦国時代の富士宮



富士宮は、徳川家康をはじめ戦国時代の名立たる武将が入り乱れ、
勢力を争い、戦った場所です。

戦国武将にまつわる歴史や史跡などを紹介する
— 特集 戦国時代の富士宮 —

戦国時代の富士宮の歴史や文化に触れ、
当時の人々に思いを寄せてみませんか。

第2回 河東をめぐる戦い

題字/志村雅芳

2023年 大河ドラマ「どうする家康」(NHK)

日曜日 放送予定

どうする家康
大河ドラマ

ひとりの弱き少年が、乱世を終わらせた奇跡と希望の物語
国を失い、父を亡くし、母と離れ、心に傷を抱えた孤独な少年・竹千代は、
今川家の人質として、ひっそりと生涯を終えると思っていた。しかし—
三河武士の熱意に動かされ、弱小国の主として生きる運命を受け入れ、
織田信長、武田信玄という化け物が割拠する、乱世に飛び込んだ。
待っていたのは死ぬか生きるか大ピンチ! 計算違いの連続! 我慢の限界!
どうする家康!

河東をめぐる戦い

戦乱の舞台「河東」

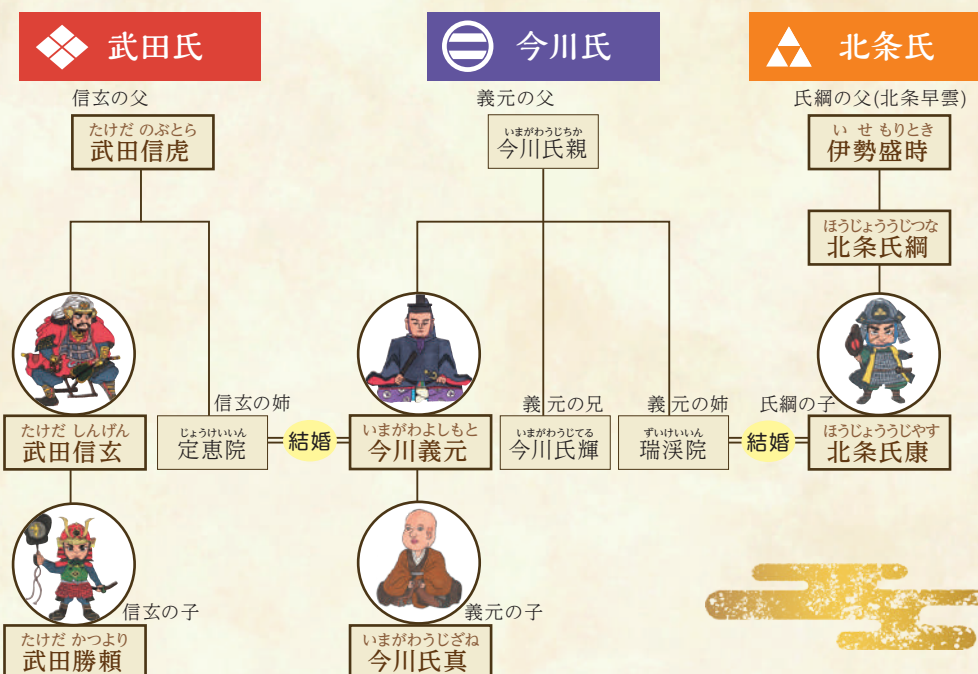
戦国時代、富士川から東の駿河国
 一帯を「河東」と呼びました。
 河東は、駿河国・遠江国・三河国
 などを支配する今川氏、甲斐国・信濃国
 などを支配する武田氏、伊豆国・相模
 国などを支配する北条氏の領地の境
 界にあったため、3者の勢力が入り乱れ、
 その領有をめぐる争いが起きました。

河東一乱の始まり

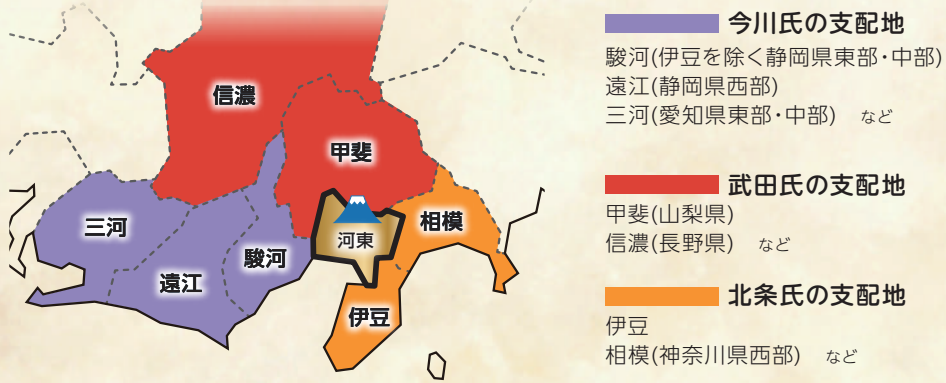
今川氏と北条氏は、駿相同盟を結
 び、武田氏に長く対抗していました。
 しかし、1537年2月、今川義元が武
 田信玄の姉・定恵院と結婚し、今川氏
 と武田氏が駿甲同盟を結んだため、
 北条氏綱は激怒し、今川氏のいる駿
 河国に軍勢を送り込みました。
 これが、河東一乱の始まりです。富
 士宮市もたびたび戦乱の舞台となっ
 た河東一乱は、1545年にも大きな戦
 いがありました。



主な人物相関図



河東一乱の頃の勢力図



どうなる家康 「波乱の始まり」—河東一乱の頃の家康—

0歳

徳川家康は、1542年12月26日午前4時、三河国の岡崎城で、父・松平広忠、母・於大の方の長男として生まれ、子どもの頃は、「竹千代」と呼ばれました。

竹千代は、60年に一度の壬寅の年、寅の日、寅の刻に生まれたとされ、その時、城には黒雲が渦巻き、黄金の龍が現れたという伝説があります。

西に織田氏 東に今川氏

この頃、松平氏は東(駿河国)の今川氏、西(尾張国*)の織田氏に挟まれ、苦しい立場にありました。松平氏は、今川氏に付き、織田氏に対抗しようとした。
 ※愛知県西部

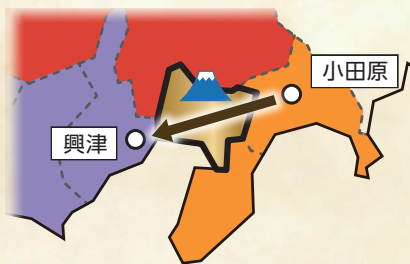
3歳

1544年、母・於大の方の実家(三河国の隣国を治める水野氏)が織田氏に付き、松平氏と敵対関係になりました。そのため、於大の方は離縁され、竹千代は母と別れることになりました。



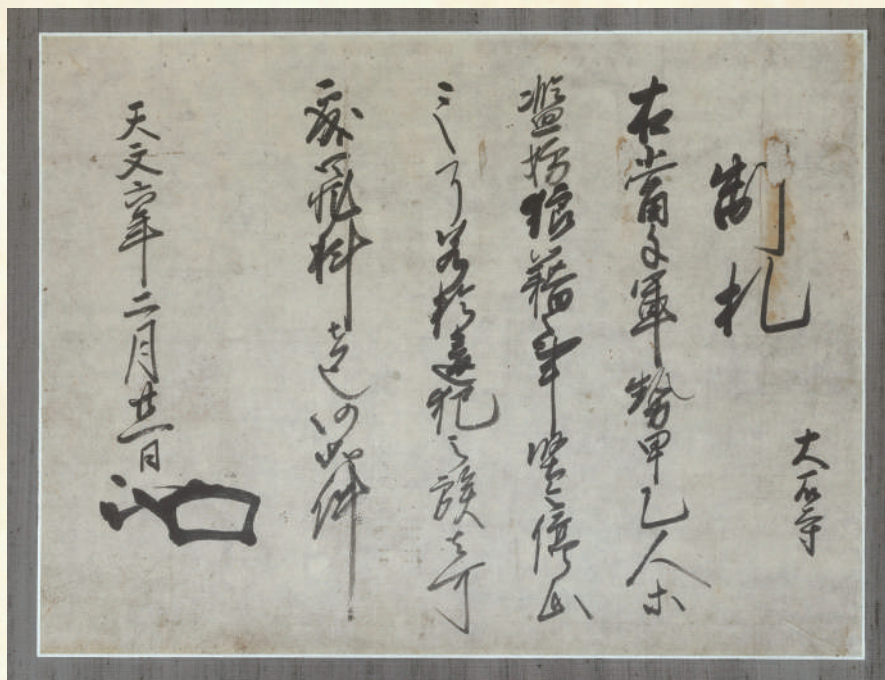
北条氏綱の「河東制圧」

駿河国に軍勢を送り込んだ北条氏綱は、1537年2月26日、興津(静岡県清水区)まで侵攻し、その後、北条氏は河東の大部分を制圧しました。



このとき、大石寺(上条)の求めに応じて、氏綱は寺内の安全を保障する禁制*を出しました。

*寺社などが、安全保障のために、対価を支払い発給してもらうもの



▲北条氏綱禁制(1537年2月21日大石寺蔵)

河東一乱を仕掛けた「北条氏綱」

氏綱は、伊豆国・相模国を支配した父・伊勢盛時(北条早雲)の後を継ぎ、北条氏の第2代当主となりました。相模国の小田原城に本拠地を置き、伊豆国や南関東のほとんどを支配するなど、北条氏を発展させました。

氏綱は、亡くなる前に子・氏康に政治のノウハウを伝える5か条の遺言を残しました。

北条氏綱公御書置(要約)

- 1 義を重んじて、後世に恥じない行動をなさい。
- 2 人の良い所を見極め、長所を最大限活用しなさい。
- 3 自分の立場を自覚し、身の程をわきまえた生活をなさい。
- 4 儉約を心掛けなさい。
- 5 戦いに勝っても油断せず、気持ちを引き締めなさい。



どうなる家康 「人質として」



6歳
松平氏は、度重なる織田氏の攻撃に耐えられなくなり、ついに岡崎城を奪われました。1547年、降伏の条件として尾張に送られた竹千代は、2年間、織田氏の人質として過ごしました。

江戸時代の『三河物語』には、「今川氏に忠誠を誓う証として、松平氏は竹千代を駿府に送ったが、家臣の裏切りによって織田氏に売られたため、竹千代は尾張の人質となった。」と書かれています。



8歳
父・松平広忠が家臣に暗殺されると、主のなくなった岡崎城には、今川氏の役人が置かれました。今川氏は、織田氏と戦い、織田信広(信長の兄)を捕虜にし、竹千代と人質交換させました。



9歳
駿府に送られた竹千代は、臨濟寺の住職・雪齋から軍学*の教育を受けたり、祖母(母・於大の方の実母)と過ごすなど、大切に扱われました。

*戦法や戦術を学ぶ学問

河東をめぐる戦い

今川義元の「河東奪還」

1539年頃になると、今川氏は勢力を盛り返しました。

武田信玄の加勢もあり、1545年、今川氏は河東の奪還に成功しました。

河東一乱が収まると、今川氏は大規模な検地*を行ったり、寺院や有力者の権利を保護するなど、河東の再建に向けた政策を展開し、河東への支配を強めました。

*水田や田畑の面積、収穫高、年貢(税金)を納める耕作者などを調べること

三国の「河東不可侵」

1554年、今川氏・武田氏・北条氏の3者は、「駿甲相三国同盟」を結び、互いの領地を侵攻しないことを誓いました。

この三国同盟は、今川氏の当主「今川義元」、武田氏の当主「武田信玄」、北条氏の当主「北条氏康」の娘が、それぞれの子に嫁ぐ婚姻同盟として成立しました。これは、今川義元の軍師・太原崇孚雪斎の提案によるものといわれています。

この同盟により、三国間だけでなく対外的にも、河東は今川氏の領地として認められるようになりました。



三国を同盟に導いた「太原崇孚雪斎」

雪斎は、今川氏の軍師として多くの合戦を指揮した、臨濟寺(静岡市葵区)や善得寺*(富士市今泉)の僧侶です。

雪斎は、今川義元の幼少期に教育係を務め、義元が今川氏の当主になってからも外交や軍事面で義元を支えました。

今川氏の保護を受けた竹千代(後の徳川家康)も、雪斎から戦法や戦術などの教育を受けました。

*戦国時代に繁栄した寺院であり、河東一乱の際は、義元が陣を構えるなど今川氏の重要な軍事拠点であった。



▲太原崇孚雪斎像(臨濟寺蔵)

三国同盟相関図



ゆかりの地



上小泉八幡社

社殿の西側に湧水があり、小泉の地名の由来になったと伝わる。戦国時代、軍事施設「小泉上坊」があった場所ともいわれる。



小泉久遠寺

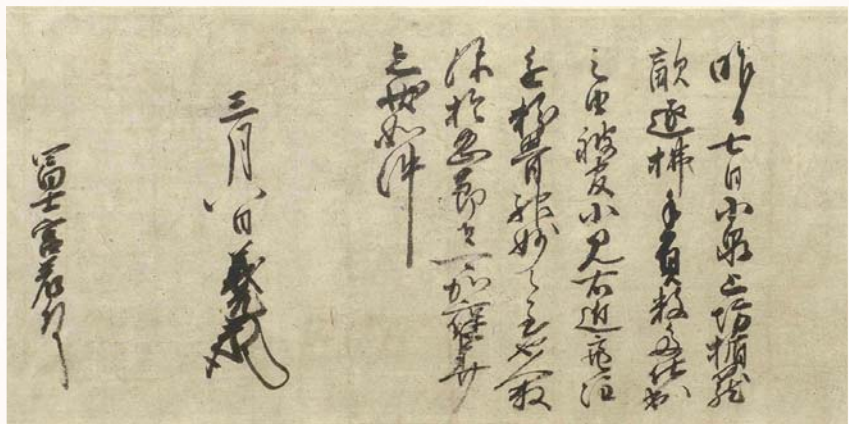
富士宮市の日蓮宗の有力寺院「富士五山」の一つ。河東一乱の際、寺の僧侶が北条氏に味方し、大きな被害を受けた。

『今川義元感状』と小泉地域

今川義元は、河東一乱の小泉上坊(小泉)における合戦で、「富士宮若*1」という人物が活躍したことを、「今川義元感状*2」で讃えています。

感状には、富士宮若が小泉上坊に籠城し、多くの負傷者を出しながらも敵(北条氏)を撃退したと書かれています。

このような記録から、小泉上坊は、軍事施設であり、小泉地域は、市内の主戦場*3の一つであったと考えられます。



▲今川義元感状(大宮司富士家文書/静岡県立中央図書館蔵)

- *1 義元の兄・今川氏輝の頃から今川氏に仕え、市内星山の代官職を務めた。
- *2 武将や大名などが、主に軍事面で特別な功勞を果たした家臣を評価・称賛するために出した文書であり、武士にとっては最高の名誉の証となった。
- *3 たびたび合戦が行われる主な場所

